

5月号

第415号

創刊 昭和29年7月  
題字 鶴木大寿先生

# 会 報

## 富山県小学校教育研究会

発行日 令和5年5月

発行所  
富山市千歳町1-5-1  
(富山県教育記念館)

富山県小学校教育研究会

印刷所 中央印刷株式会社

### 令和5年度役員 ごあいさつ

#### 切磋琢磨し、やりがいのある研究活動を

会長 荒田 修一(富・堀川小学校長)



富山県小学校教育研究会には、70年以上もの長きにわたり、脈々と受け継がれてきた研究の歴史があります。これまでの研究の成果やあしあとを大切にしながら、子供の確かな学びにつながる研究を推進するよう尽力してまいります。

小教研活動には、世代を超えたつながりをつくるとともに、自らを見つめる契機とし、よりよい授業を目指して実践を深めることができるよさがあります。会員一人一人の実践を交流する中で、子供の姿に学び、やりがいのある授業研究を展開したいものです。

コロナ禍が収束に向かう今、改めて「実践資料を持ち寄り、子供の姿で語ろう」の合い言葉に込められた思いや本質を大切に、若手からベテランまでが、互いに尊重し合い、切磋琢磨する研究活動を進めていきましょう。

#### 求める心と変わらぬ合い言葉

副会長 上田 和則(入・上青小学校長)



コロナ禍の3年間、GIGAスクール構想の一人一台端末を活用した実践が進みました。教育活動が、子供一人一人の学びを保障する新たなステージに入ったと言えます。小教研活動においても、各ブ

ロック・研究推進校では、研究主題にある「主体的・対話的に探究し、確かな学び」を目指し、創意を凝らした「学びを止めない」多様な実践がなされました。研究活動に制約があるほど、学びの意欲に駆り立てられ、よりよい授業実践を求める心が小教研活動を支えているのでしよう。

人工知能の進化等、社会は急速に動いていますが、県小教研は研究主題を変えながらも、70年を超える歴史を歩んできました。「実践資料を持ち寄り、子供の姿で語ろう」の合い言葉が県小教研の根底に流れていたからこそと考えます。県小教研の実践が、会員の皆様の授業力向上に直結し、子供たちの確かな学びにつながるよう、精一杯努めたいと思います。

#### すべての会員がつながり、 学び合う小教研活動

副会長 土田 泰美(富・鶴坂小学校長)



新しい学校生活様式を取り入れた3年間の教育活動から、より前を向いて、より前向きな気持ちで小教研活動に取り組むことができる年を迎えました。

富山県小学校教育研究会は、『14教科等部会による研究』、『各ブロック小教研の主体的な活動』と『学力調査事業』を核として、研究を推進しています。昨年度は、「教育課程研究集会」において3年ぶりに会員全員が参集し、研究推進校の実践を通して学び合うことができました。「子供の姿を基にした実践研究の場」に経験の異なる若手からベテランまで幅広い年齢層の会員が一堂に会し、一人一人のキャリアステージに応じた学びがあったことは、大変有意義なことでした。

私たちは、学校間を超えた「横のつながり」と経験豊かな会員からの教師力の伝承という「縦のつながり」を強めながら、子供「一人一人を見つめ育てる」ことを研究推進の基本として、教員一人一人が確かな手応えを実感できる研究活動を推進していきたいと思ひます。「すべての会員がつながり、学び合う」小教研活動となりますよう、会員の皆様と共に歩んでまいりたいと思ひます。

#### 研究授業で学んだこと

副会長 片境 俊二(高・牧野小学校長)



若い頃、何回も研究授業をさせてもらいました。その度ごとに「展開はどうするか」「どんな問いにしたらよいか」「もっとよい資料はないか」など、あれこれ悩んだものです。先輩や同僚の先生に、遅くまで一緒に考えてもらったこともありました。本を読んでも分からんからと、実際に海外に出かけて行ったこともあります。「生みの苦しみ」ともいうべき過程を乗り越えた研究授業では、終わった後の喜びは大きく自分の財産となります。そんなふう

に創りあげるのが授業なのだと思ひ理解しています。その時に学んだことは、よい教材とは教師にとって都合のよいものではなく子供の心を揺さぶるもの、授業を受ける子供を頭におきながら教師自身の目と足で実際に探し開発していくもの、そして授業ではその教材と子供をつなぐのが教師の腕の見せどころであるということです。本会の合い言葉である「子供の姿で語ろう」とは、まさしくこのことなのだと思ひます。今年度も熱意ある先生方によって行われる数々の研究授業が子供の成長につながり、県小教研の活動が確実に前進していくよう尽力したいと思ひます。

#### 学ぶ意欲を支える活動に

副会長 廣瀬 孝子(小・大谷小学校長)



令和3年度と4年度の2年間、国語科の学力調査部長として小教研活動に携わる機会をいただきました。2年間の経験を通して感じたのは、委員の先生方の頼もしさです。時間と労力を惜しまず、授業改善に役立つ問題にしようと思ひ内容や言葉を何度も吟味しながら真摯に取り組む姿に、勇気付けられました。また、子供たちの学びに思いを巡らせ、日々授業に取り組む仲間の立場になって率直に意見を出し合う様子から、教育の未来への希望を感じました。

コロナ禍の3年間は、私たち教員にとって、研修の意義や必要感を改めて見直す機会となったと感じます。県小教研は、それぞれのキャリアステージに応じた学びを学校の枠を超えて可能にする貴重な場です。研究活動が、教員の学ぶ意欲を支え、手応えや喜びにつながるよう、精一杯努めてまいります。